Kitakanto Med J
2007；57：79〜80

第11回群馬 Clinical Oncology Research 勉強会

日　　時：2004 年 11 月 11 日 (木)
場　　所：群馬大学刀城会館
当番世話人：森下　靖雄（群馬大院・医・臓器病態外科学）

〈一般講演〉

1．骨肉腫の予後評価における FDG-PET の役割

渡辺　秀臣，佐藤　潤香，鈴木　涼子
篠崎　哲也，高岸　憲二
（群馬大院・医・機能運動外科学）

骨肉腫患者の予後因子としての PET の有用性を検討した．CDF が 7 例，転移発現例が 4 例であった．初診時 FDG-PET の SUV 値の平均は，CDF 例 6.55 に対して，転移発現例で 6.63 であった．化学療法後の SUV 値の改善率の平均は 47.6％に対して 18.9％と CDF 例が高い傾向を示したが有意差は見られなかった．初診時 FDG 値および化学療法の反応程度から骨肉腫の予後を判断することは難しかった．

2．進行下部直腸癌に対する温熱化学放射線療法の効果判定　ーMRI を用いてー

松田真里子，桜井　英幸，野中　哲生
原島　浩一，北本　佳住，長谷川正俊
中野　隆史（群馬大院・医・腫瘍放射線学）
山口　　悟，井出　宗則，堤　荘一
浅尾　高行，桑野　博行
（群馬大院・医・病態総合外科学）

【目　的】 温熱化学放射線治療を施行した進行再発直腸癌の治療効果判定における MRI の役割について報告する．**【対象と方法】** 温熱化学放射線療法を施行した 20 例 (新鮮例 17 例, 吻合部再発 3 例) を対象とした. 治療前の高分解能 MRI の T2 強調画像による進達度 (UICC 分類) は T2：2 例, T3：16 例, T4：2 例であった. 総線量 40-50Gy の期間中に 5-FU, アイソボリンを投与し, 温熱療法は週 1 回の併用をした．治療終了後 6 週目の MRI で効果判定を施行した．根治手術を施行した 14 例では, MRI 所見と病理組織学的進達度を比較した．**【結　果】** T3 の 16 例のうち，5 例が T2 となり，T3 の 3 例および T2 の 1 例では腫瘍の描出が認められなかった. 全体で T 因子のダウンステージは 11 例 (55％) であった. MRI と切除標本との T 因子の一致率は 14 例中 11 例 (78％) であった．**【結　論】** 術前温熱化学放射線療法により半数以上に T 因子のダウンステージが得られた．高分解能 MRI は治療効果判定に有用と考えられた．

3．癌研究における糖鎖の重要性　ー血清オロソムコイド糖鎖の癌性変化と腫瘍マーカーへの応用ー

橋本　信次，浅尾　高行，桑野　博行
（群馬大院・医・臓器病態外科学）
矢澤　伸　　（大塚製薬徳島研究所）

【緒　言】 血清オロソムコイド (AGP) のグライコフォームの癌性変化を明らかにし, 腫瘍マーカーとしての可能性を検討した．**【対象・方法】** 術前後の担癌患者 45 例の血清 AGP 量測定と 2 種類のレクチン及び抗 AGP 抗体を用いた二次元電気泳動 (CAIE 法) で血清 AGP グライコフォームを解析し, AGP のフコシル化及び糖鎖の分枝度の割合によってグライコフォームを分類した．**【結　果】** 担癌患者の血清 AGP 量は健常者に比べ有意に高値を示したが, 術式や再発・転移の有無などとは必ずしも関連しなかった. 一方, AGP グライコフォームは炎症に基づく変動以外に著しい癌性変化が認められた. 即ち, 再発・転移を含む予後不良例 (11 例) は術後長期に渡って高フコシル化 3, 4 本鎖を有し, その他のグライコフォーム症例では予後良好であった．**【考察】** 血清 AGP のフコシル化と分枝度に基づく AGP グライコフォームが癌の予後予測に有用であり, 新しい腫瘍マーカーになりうる可能性が考えられた．